別紙１－１

# 論文審査の結果の要旨および担当者

| 報告番号 | ※　　第　　号 |
|---|---|

氏　　名　髙瀬　奈美

論文題目　**Texting and Face-to-Face Speaking in Task-Based Language Teaching**

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　尾関　修治

委　員　　名古屋大学教授　　杉浦　正利

委　員　　名古屋大学准教授　村尾　玲美

別紙１－２

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、チャットやメッセージングなどの主に文字によるオンラインコミュニケーション（以下 texting）を各種の語学学習課題（タスク）と組み合わせて外国語としての英語学習に利用した場合にどのような影響があるかを、語彙の多様性・正確性・文法・統語・流暢性について調べ、オンラインではない対面でのタスク活動と比較検討したものである。

研究の目的を明示した第 1 章に続いて、第 2 章で外国語学習の観点から見た texting の特徴について自己修正の可能性に着目して整理した上で、その有用性を述べるとともにスピーキングでの実際の影響の詳細が明らかになっていないことを示している。第 3 章では先行研究を検討している。それによると、texting 中の自己修正については、情報が視覚的に与えられることと情報交換のペースがゆるやかであることにより第二言語習得の効率が向上することにつながると示唆されている（Sauro & Smith, 2010）。一方、texting とタスクとの組み合わせにより効率的な外国語学習が期待できることも予想できるとした。

第 4 章で外国語学習指導でのタスクのタイプを整理した上で、Texting がスピーキングと類似した言語的側面を有していると仮定し、以下のリサーチクエスチョンを設定した：1) Texting を利用してタスクを繰り返し行った場合、事後のスピーキングテストの語彙の使用・文法・構文の複雑さにどのような影響を及ぼすか、2) Texting を利用して制限時間内でタスクを行った場合、事後スピーキングテ ストの語彙の使用・文法・構文の複雑さにどのような影響を及ぼすか、3) Texting を利用して新しい熟語の学習を行った場合、対面学習とでは違いが あるのか。

第 5 章は予備実験であり、実験参加者 104 名（CEFR A1～B1）の語彙調査と 3 種類のタスク（Interview, Narration, Decision-making）を課してスコアの分布を整理した。その結果、interview タスクは学習者の分散が少なく必要とする語彙レベルが適切であることを見出し、これを本実験で使用することとした。

第 6 章の実験 1 では、実験参加者 32 名（CEFR A1～A2）に対して、繰り返しタスクを実施し、事前事後に 1 分間のスピーキングテストを行っている。対面群と texting 群に分け、対面群には面接でインタビューを行い、texting 群にはオンライン上で texting を利用したインタビュータスクを行った。これを 3 回繰り返しテスト結果の変化を分析した。その結果、texting 群では、語彙のエラー率が内容語と機能語の両方で下がり、統語的複雑性(IPSyn)の文構造スコアが向上した。また、texting 群の事後テストでは母語の使用・繰り返し・省略が減少した。Texting

群のみが語彙の正確性が向上した理由は、タスクに従事した時間が対面群の 2〜3 倍と長いためとも推測できる。そこで、次の実験 2 では時間を一定にして同じ実験を行った。

第 7 章の実験 2 では、タスクに従事する時間を一定にして実験 1 と同様の実験を行っている。その結果、texting 群の内容語でのみ語彙のエラー率が改善した。すなわち、texting 群の事後テストにおいて、正確な語彙の選択・繰り返しについて改善が見られた。特にタスク中の発話において、texting 群では繰り返しや母語使用がみられなかった。これは、texting では視覚的に産出言語を確認できることから、送信前に間違いに気付き、修正できたためと考えられる。一方でタスクに既知語が含まれるため、新出語彙についての学習効果が課題となった。

第 8 章の実験 3 では、実験参加者 37 名（CEFR B2 以下）に対して、新出熟語の習得の可能性を検証している。2 群とも毎回 5 つの新出熟語の習得をするタスクを課している。一つは新出熟語が含まれた質問文を利用したインタビュータスクであり、もう一つは新出熟語を反復するタスクである。両方のタスクを 1 週間に 1 セット行い、3 週間続けた。対面群は全て口頭で行い、texting 群は texting を利用したインタビュータスクとタイピングを利用した反復練習で行った。事前事後のスピーキングテストと空所補充問題を使用して新出熟語の定着を測定した。その結果、空所補充問題の結果に差はなく、両方とも高い習得率を示した。事後テストでは、texting 群で語彙のエラー率が内容語と機能語の両方において減少し、統語的複雑性スコアと発話速度が向上した。一方の対面群では、発話速度と調音速度が向上した。調音速度は texting では向上しなかった。

各実験を通して、一定の条件下で texting を利用した場合、その後のスピーキングにおいて語彙の正確性・統語的複雑性・発話速度に影響することが明らかになった。一方、同じタスクを対面で行った場合は、十分な時間が確保された場合のみ調音速度の両方が向上する傾向が見られた。

Texting 群では、視覚的な情報が利用できることや情報交換がゆるやかであることから語彙の繰り返しや母語使用などのエラーが減少し、その後のスピーキングテストで語彙の正確性が向上し、統語的複雑性への効果も生じたものと考えられる。つまり、CEFR A1-B1 の初級外国語学習者は、Texting を利用することによって語彙使用の誤りに気付き、修正し、その後のスピーキングに好影響をもたらすことが明らかになった。

一方、対面では、流暢性指標である調音速度の向上が確認できたが、これは、Texting 練習では得られなかった効果である。Texting を利用した第二言語習得の学習方法は語彙の正確性や統語的複雑性を向上させ、産出言語の形式に注意を向けるようになることが明らかになった。し

別紙１－２

かしながら、Texting は発話をしないことから調音速度に効果はなく、異なるモードが与える言語学習効果の違いが判明した。

口述試験では、各本実験での実験対象者の均一性が問われ、カウンターバランスをとるべきであったことや極端な個人差を排除できなかったかといった指摘が審査委員からあった。これに対しては大学授業現場を利用しての実験という性格上、検定試験(TOEIC)によるクラス分けに基づいた実験対象者のグループ分けなどの制約があったことが説明され、今後の追試験の課題とした。また、texting 課題での量的制限を時間による制限とすべきかタイピングの産出量による制限とすべきかという議論も提示され、改善のための手法が議論された。

本論文は外国語教育の現場で実践的な手法や効果を検討した研究であると同時に、第二言語習得の観点からも今日的なコミュニケーションメディアに即した興味深い研究でもあり、審査委員一同、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判定した。